

Contemporary

British and American

Writers III

現代英米小説の担い手たち

III

90年代への視座

フェニックスの会編

弓プレス

現代英米小説の担い手たち III
90年代への視座
Contemporary British and American Writers III

平成3年11月20日 初版発行

編者 フェニックスの会

発行者 寺内由美子

発行所 鷹書房弓プレス

東京都新宿区水道町2-14 柴木ビル(〒162)
電話03-5261-8470代 FAX03-5261-8474

印刷 平河工業 製本 関川製本
ISBN4-8034-0379-1 C3098

現代英米小説の担い手たちⅢ

90年代への視座

Contemporary British and
American Writers Ⅲ

フェニックスの会編

ヨプレス

《筆者紹介》（掲載順）

- 大 平 章 （早稲田大学助教授）
木元喜久子 （東京農工大学講師）
兼 坂 睦 子 （早稲田大学講師）
鈴 木 順 子 （東京立正女子短期大学専任講師）
清藤多加子 （国士舘大学講師）
堀 邦 維 （日本大学専任講師）
木 内 徹 （日本大学専任講師）

目次

序 説——現代小説の流れ……………	大平 章……………5
——英米小説を中心にして……………	
批評と創作をめぐって……………	大平 章……………26
——マルカム・ブラッドベリーとデイヴィッド・ロτζ……………	
狂気と語り……………	木元喜久子……………56
——ジーン・リース『広い藻の海』……………	
過去を捉えるということ……………	兼坂睦子……………90
——ジュリアン・バーンズ『フロベールの鸚鵡』……………	
愛の黙示録……………	鈴木順子……………118
——マーティン・エイミス『ロンドン・フィールズ』……………	

「終わり」の終わり……………	清藤多加子……………	152
——ポール・オースター『ニューヨーク三部作』と『ムーン・パレス』		
カリフォルニアのユダヤ人……………	堀 邦維……………	188
——デイヴィッド・レーウィット『イークオル・アフエクシヨNZ』		
昇華された黒人受難史……………	木内 徹……………	218
——トニ・モリソン『ピラウィット』		
あとがき……………	鈴木順子……………	245
作家紹介……………	各論文冒頭……………	
主要参考文献……………		
索引……………		
(1)	(7)	

序説―現代小説の流れ

―英米小説を中心にして

(1)

大平 章

二十世紀もあと十年足らずで終わろうとしている今、現代文学の収斂する方向を見定め、かつ将来の発展の可能性を探ることは大いに興味深い。ところが、このような作業は常にそれ固有の困難を伴う。何故なら我々は未だに文学を研究する絶対的な方法など知らないし、たとえば社会的、歴史的な因果関係からある種の答えを引き出すとしても、それはせいぜいある特定の文学の一般的傾向や文学運動の全体的な性格にしかすぎないからである。あえてこのような限界を念頭に置きながら、ここではまず、両世界大戦を今世紀の重要な分岐点とし、時間的推移に沿って現代文学の流れを概観してみたい。

文学史のあり方と文学の認識方法は別にして、話題を小説に限定すれば、特に六十年代以降、

欧米の小説に対してポストモダンズムという文学用語が使われていることに注目してよからう。ポストモダンズムはある特定の小説家の明確な方針を伴った統一的な文学運動として展開されている訳ではないが故に、その全体像を把握するのは困難であるが、少なくとも、流動的で混沌とした現代小説の状況を示す便利な通称であるかも知れない。その言葉の独特な響きに我々は、小説の技法に対する極度に意識的な態度、あるいは伝統的な文学の価値観を疑問視し、それを越えようとしながら未だに真の突破口を捜せない苛立ちを感じできると同時に、巨大に膨れ上がった広大無辺の都市空間の中で客観的対象を認知できなくなった人間の言語的虚構による存在証明を見出すことができよう。このようなポストモダンズムの文学が欧米だけでなく、今や戦後という言葉が無くなり、伝統的な価値観の急速な後退の中で画一的な都市文化と高度に発達した科学技術に支配されている日本の社会で生まれても不思議ではないであろう。つまり、ポストモダンズムは、それを成立させる社会的、文化的な素地があれば、現代文学の共通認識として世界的に広がる可能性を持っているのである。

ポストモダンズムの成立要件として一般に、西洋的な文学思想の解体、小説における意味の喪失、ヒューマニズムに対する不信などが挙げられているが、その位置づけに關していうならかなり意見の揺れがある。たとえば、それは、「前衛派の反抗が活気を失い、因習化した時代における遅れてなされた前衛主義の行為である」という捉え方もあれば、「枯渇の文学」や「物語

の消耗」を自覚しながら、「小説の新たな豊饒」を引き出す技法である、という逆説的な見方もある。その厳密な定義はともかく、ポストモダニズムと呼ばれる小説は、五十年代のフランスのヌーボ・ロマンに始まり、六十年代のアメリカのメタフィクション、及び七十年代に異彩を放ったラテン・アメリカのマジック・リアリズムを経て今日に至るまで様々な実験的手法によって書かれてきた。しかし、実験小説の源流となるとやはり今世紀初頭のモダニズムの時代に遡らざるをえない。

モダニズムの文学の特徴の一つとして、所謂「小説の死」、あるいは「物語の解体」が既に叫ばれていたことが挙げられる。その批判の対象は十九世紀における市民階級の叙事詩ともいうべきリアリズム小説であり、H・ジェイムズ、V・ウルフ、M・ブルースト等は、小説は人生と歴史の直接の描写でもなく、作家の倫理的、道徳的判断を含むものでもないことを主張し、「意識の流れ」や「複数の視点」を導入して新しい心理小説への道を開いた。そして、その頂点はジョイスの『フィネガン徹夜祭』によって究められることになる。さらに、この時代の批評家の多くが、たとえば、E・パウンドやT・S・エリオットに見られるように、同時に優れた創造者であり、彼等の批評理念は常に創作に反映されていたことも忘れてはならない。つまり批評と創作の機能の分離はまだ起こってはいなかったのである。

ところが、ポストモダニズムの時代になると、文学を研究する様々な学問が確立され、批評

家は小説における叙述、言語、思想的系統などをそれぞれ知的な学問として体系化し、あるいは、いったん作り上げたものを解体する逆説的な方法によってその知的優位を主張し始めた。こうして作家と批評家の地位の逆転が起こり、作家は今や美学上の指針を与えてくれる知的ブルジョアではなくなり、巨大な批評株式会社のために商品を生産するプロレタリアに転じてしまったのである。作家と文学研究者との醜惡な騙し合いを描いたW・ゴールドディングの『紙人間』は、現代における文学の創造と批評の直面している困難な状況を示唆してくれる。

という訳で、多くの批評家たちが文学における革命、及び芸術のラジカルな再生が最も真剣に叫ばれ、国際的な規模で起こったこのモダニズムの時代の現代文学の出発点と見なす理由がある。B・バーゴンジーはモダニズムの文学の一般的特徴として、意識的な美学上の関心、人間の現実認識の不確実性、文学の形式に反映される現代の都会生活の複雑さ、現代のカオスに秩序を与えてくれる原始の神話の復活、集中的で孤立した「想像力」や「瞬時」や「直観」による真理の把握、無意識的世界の強調、人格の不安定性と断片性、アイロニカルな並列や二重写しの技法などを挙げているが、その大部分はポストモダニズムの基調に連なるものであり、文学の実験的方法のあらゆる領域を網羅しているといえよう。モダニズムの思想の根底には、十九世紀のダーウィニズム、実証主義、唯物論的決定論に代わるニーチェ、フロイト、ベルグソンなどの今世紀初期の新しい哲学や心理学の影響があり、加えて、芸術思想として、印象主

義、未来主義、キューヴィスム、フォーヴィスムなどが流入していたことは事実である。

勿論、モダニズムは何の前触れもなく忽然と今世紀の文学の舞台に姿を現した訳ではない。

その先駆けをなすものとして十九世紀末のフランスの象徴主義の運動がある。マラルメ、ヴェルレーヌ、ボードレール、ランボーなどの詩人はデカダンスを通して日常化、習慣化された意識や言葉を打破し、恐怖と戦慄の感覚の中に音楽的な美の世界を見出そうとしていたし、その影響はドイツの新ロマン派の詩人ゲオルゲやホーフマンスタールに及び、やがて極度に主観主義的な感性の解放を旨とするドイツ表現主義への道を開くことになる。さらに、イギリスでもフランスの象徴主義はA・シモンズ、W・ペイター、O・ワイルド等に受け継がれ、彼等はヴィクトリア朝の世俗主義に抗って、唯美主義による詩、評論、戯曲、小説を著した。世紀末に登場したこのような芸術運動の精神はモダニズムを語る際に見逃すことができない。

フランスにおけるモダニズムはその卓抜した芸術理論と創造活動において、及びヨーロッパの芸術的統一を意識の自由と解放によって果たさんとするヒューマニズムにおいて先駆的な役割を担った。象徴主義の風土の中から出発したヴァレリーやジイドは、それぞれ詩からすべての散文的要素を除去し、小説の非小説要素を否定する「純粹詩」、「純粹小説」を目指し、完璧な美の理想を追求した。またブルーストはその大河小説『失われた時を求めて』でフランスの心理主義小説の伝統を拡大し、過去の記憶を辿る過程を意識下の世界に求め、ジョイスの『ユ

リシリーズ』と共に今世紀の最も優れた長編小説を完成した。やがてフランスのモダニズムはT・ツアラ、A・ブルトン、L・アラゴン等による文学の破壊的革命、つまり、従来のあらゆる芸術の既成概念の否定と言葉の意味の束縛からの解放を主張するダダイズム、シュールレアリスムに発展していくことになる。

イギリスにおけるモダニズムの興隆には特筆すべきものがある。おそらくイギリス文学の歴史においてこれほど多くの文学の巨匠たちがナショナリズムの壁を越えて一つの運動の名の下に結集した時代はなかったであろう。その国際性は空前絶後といえるかも知れない。彼等の多くは、たとえば、H・ジェイムズ、エリオット、パウンド、W・ルイス、ジョイス、J・コンラッドなどがそうであったように、国外在住者か国籍離脱者、もしくは自由奔放な芸術家であり、イギリス人のウルフやD・H・ロレンスにしてもウィクトリア朝の支配的な価値観や階級制度に異を唱える人たちであった。このような多彩な顔触れがイギリス文学に異国的な要素を注ぎこみ、モダニズム全体に活気と多様性をもたらしたといえる。

イギリスにモダニズムの気運を喚起した芸術思想にE・T・マリネッティに指導された未来主義がある。それは、現代の機械文明や科学技術に触発され、詩、音楽、絵画などの領域において過去との訣別を唱えるものであったが、その影響はイギリスでは実利主義に支配されたウィクトリア朝のエトスの克服に現れた。そして、パウンド、エリオット、ジョイス、ロレンス

などの詩人や作家はその活路を、それぞれ中国の儒教や中世の吟遊詩人、ダンテやJ・ダンのカトリック思想、ホーマーの叙事詩、アメリカ・インディアンやエトルリア人の太古の意識に求めた。加えて、モダニズムの前衛派としての意識的な活動が数々の宣言や彼等独自の雑誌に反映されたのもこの時代の特徴である。たとえば、パウンドはR・オールディントンやH・ドゥーリトル等と共に、視覚的想像力による詩の瞬間的表現を目指すイマジズムの運動を展開し、さらにそれを一層押し進め、未来派の精神を受け継いでヴォーティシズムを宣言する。そして、パウンドとルイスの発行する機関誌『ブラスト』が運動の先兵の役割を果たすことになる。

作家のモダニズムを意識した過激な発言もまた注目に値する。ウルフは人間の複雑多様な意識の世界を構築することが作家のなすべきことであるとして、A・ベネット、J・ゴールズワージー、H・G・ウェルズのリアリズムを拒否し、一方、ロレンスも、小説の登場人物は固定された社会的存在ではなく、常に変化、流動するものである、と主張し、E・ガーネットやゴールズワージーの伝統的な小説の概念に異論を唱えた。こうして、モダニズムの作家たちは、文学作品と金銭の等価をそれほど疑わず、むしろそれに魅了され、資本主義社会の寄生的存在に甘んじていた従来の作家たちに対して、自らの芸術家としての自立と誇りをはっきりと宣言したのである。

ところが、欧米の各国で国際的な運動へと発展したモダニズムの勢いも三十年代から四十年

代にかけて、世界的な金融恐慌とファシズムの台頭により徐々に衰え、それに代わってW・H・オーデン、S・スペンダー、G・オーウェルなどに代表される「政治の文学」の時代が到来する。ヨーロッパの危機を救う国際的な知識人の思想は、今やモダニズムからコミュニズムに移り、その理想はスペイン市民戦争における自由と正義の戦いで頂点に達する。がしかし、彼等の運動はソビエトのスターリニズム化と国際共産主義の挫折により敗北してしまふ。ウルフとジョイスの四十一年の死は実質的なモダニズムの終焉を象徴的に表している。オーウェルは、過去の神話的世界に回帰しようとするペシミズムに支えられたモダニズムの文学は、ファシズムと飢餓の時代には書かれえないものであるが、その優れた技法による芸術的価値はこれから先も認められるだろう、という意味深長な言葉を残し、その後、平易な表現によって政治的眞実を追求するリアリズムの道を歩む。そして彼のイギリス的ヒューマニズムはやがて五十年代のイギリス小説の風土を形成することになる。

(2)

第二次世界大戦後、ホロコーストとアウシュビッツの恐怖は近代のヒューマニズムがいかに脆いものであるかという教訓を残し、また原爆の悲劇は科学に対する人類の絶対的な信頼を根底から覆すことになった。さらに、二つの相容れないイデオロギーの対立が世界を冷戦の危機

に陥れ、同一民族でありながら、歴史の異なった経験を味わうことを余儀なくされた国もあった。このような状況の中で出発することになった戦後の文学は、戦前の文学的遺産をそのまま母体にする訳にはいかなかった。モダニズムでさえそのペシミズムと破壊的な想像力の中にファシズムの世界観の萌芽を指摘されることもあった。戦後の文学はあらゆる意味でファシズムの残滓を取り除かなければならなかったのである。

戦後の文学的再生はドイツやイタリアやフランスのように、ファシズムが自国の文化を破壊したり、知識人や政治家がそれと密かに協力していた国々でまず始まった。ドイツでは、W・リヒター、G・グラス、H・ベルなどが中心となって四十七年に作家同盟「グループ47」を結成し、過去と断絶状態になっている文学や知的文化の再生を政治的、倫理的機能に求めた。イタリアでも反ファシズムの左翼系作家たちは荒廃したイタリアの現実から出発し、アメリカのモダニズムや実存主義的手法を駆使してイタリアの悲劇、及び民衆の貧困をネオ・リアリズムの立場で描こうとした。やがてネオ・リアリズムから出発したI・カルヴィーノは空想科学小説、旅行記、民話などを織り交ぜたポストモダニズムの実験小説を手掛けることになる。

戦後のフランス文学はサルトルとカミュの実存主義から始まり、両者の文学観と政治的発言が世界に与えた影響は無視することはできない。実存主義の哲学・文学の源流は、キルケゴール、ニーチェ、ヤスパース、ハイデガー、カフカにあり、神を失った人間の悲劇、日常性に埋

没し、非本来的な現存在になり果てた現代人の不安、市民社会における個人のアイデンティティの喪失に見られるように、近代の合理主義的機械文明に対するアンチテーゼとして生まれた一種の絶望の思想であった。サルトルとカミュの意義は彼等が「不条理」という人間の現実から、それぞれ「参加」の意識による政治的行動、「反抗」の論理によるヒューマニズムを引き出そうとしたことである。彼等の著作の多くは戦後文学の古典であり、不安と絶望の中から新たな光明と脱出口を求めていた同時代の作家や知識人の指針になったことは確かである。

ところが一方、フランスではもう一つの文学の流れがあり、ポストモダニズムに大きな影響を及ぼすことになる。それはN・サロート、A・ロブリグリエ、M・ビュートル等によって始められた所謂ヌーボ・ロマンである。彼等は、いずれも「疑惑の時代」、「存在の不条理」から人類救済のヒューマニズムを求めることは論理的矛盾であり、むしろそこから発生するのは言語の無意味、あるいは道德的世界の解体である、と主張する。そして、不条理的世界の形式的探求が小説の主眼になる。

さらに、このようなヌーボ・ロマンの出現とはほぼ同時代に、ソシュールの影響を受けたR・バルトの構造主義批評が台頭し始めることに注意しなければならない。つまり、戦後のフランス文学は小説ばかりではなく、批評においても「意味するもの」と「意味されるもの」の不一致に気づき、それをいち早く批評の理論に取り入れていたのである。それから後、ヨーロッパ

パの近代が築き上げたブルジョア文化とそのヒューマニズムを歴史の座標の中心からはずす解体の思想がM・フーコやJ・デリダによって着手されたのも歴史的必然であつたかも知れない。戦後のアメリカ文学の興隆はおそらくどの国よりも顕著であらう。既にアメリカ文学はイギリス文学の支流であることをやめ、自国の文学的伝統をヨーロッパのそれと融合させることができるほど成長していた。特に戦後、その影響力はヨーロッパを凌ぐほどまでになったといつてもよいかも知れない。このような状況を生み出した原因として、戦後、アメリカが世界の金融の中心になり、高度に発達した資本主義に伴うアメリカ独特の「豊かな社会」、「若者文化」などが出現したことが挙げられよう。しかし一方では、大衆消費社会の矛盾として「孤独な群衆」や「人間疎外」といった文明の害悪が生じたことも事実である。

小説はそのようなアメリカ的現実にも最も敏感に反応し始めた。勿論、それ以前にもヨーロッパのモダニズムをアメリカの土壌に取り入れ、アメリカ文学を国際的なレベルまで高めたW・フォークナー、E・ヘミングウェイ、S・フィッツジェラルドなどの優れた作家が輩出していたが、五十年代の新しい世代に属する作家たちは、極度に近代化され、都会的で、豊かなアメリカ社会を代表する人々であり、旧世代とは違って様々な民族的背景を持っていた。まず、S・ペロウ、B・マラマッド、P・ロス、N・メイラーなどのユダヤ系アメリカ人作家は、文化的、民族的危機を味わったユダヤ人の立場から社会の軍事化や全体主義化に反対してヒューマニズ